

わがまちの紙のルーツ

その三…機械による

製紙のはじまり

昭和五十六年五月五日号

江戸中頃から人気であった「駿河もの」と呼ばれた半紙は富士郡の農家が、農閑期を利用した家内工業によって生産していました。

ところが、明治二十年以降芦川万次郎による製紙伝習所の設立をきっかけに、機械による製紙が発達していったのです。

製紙を生んだ田宿川

今泉の芦川万次郎は明治二十年に手漉和紙の工場を建て改良半紙の生産をはじめました。その後、田宿川流域に次々と手漉工場が誕生して、製紙発達の素地がつくられていったのです。

一方富士山麓の開墾が進み、大量のみつまたが生産されるようになったことから、和紙の増産がいつそうすすみました。

明治二十一年芦川万次郎は、田宿川に沿った今の渡辺医院のところに製紙伝習所を設立して、技術者の養成に努力しました。

明治二十三年には富士製紙第一工場が入山瀬にできました。中央の大資本を導入した本格的な機械による製紙工場でした。このことは、地元資本家の製紙業への関心を深めると共に製紙技術を習得した労働者によってこの地方の製紙業の振興に大きく寄与する結果となりました。

芦川万次郎とはこんな人

孫の芦川忠正さん（天間南）

昔の田宿川は、今とはくらべものにならないほど豊富できれいな水が流れていました。

祖父万次郎は、その水に着目してよい紙をつくろうと製紙伝習所を造ったのです。

とにかく物を考えるのが好きで、人のためにつくした人でした。でも金もうけの方はうまくなかつたようで、これだけはごうも代々続いているようです。ハツハ……。

紙をつくるのに

《水がどれくらい必要か》

紙を一ト作るのに水五十トから五百ト必要です。板紙や厚紙にくらべ、うすい上質紙ほど水を必要とします。市内では一日に百七十万トの水が製紙に使われています。

《木がどれくらい必要か》

紙を一ト作るのにみどりの木（直径十六センチ、高さ八メートル）二十本が必要で、家庭で読み終った新聞紙一年分（五十巻）でみどりの木一本を守ることができます。